谷地区民俗調査報告②

大将軍神社の祭りについて

佐藤周太

一、序

挾間史談会では、挾間町内にある日吉神社（鬼崎地区）・大将軍神社（篠原地区）・白岳神社（谷地区）の祭りについて聞き取り調査をすることとなった。私は今回、大将軍神社の聞き取りに参加した。

当日、参加者五名は現地集合となっていたが私は二宮会長と佐藤末喜さんと三人で自家用車で現地に着いた。市道に接する神社の駐車場は広くて立派に整備されている。約束の三十分前だったが既に総代長御夫妻が到着しており丁重な出迎えを受けた。

風が吹くと少し寒かったが広い境内を歩いてみた。

神社正面は駐車場とは反対側にあり由布市道に接しているが境内よりも相当低いため直ぐ階段がある、階段を上りきると鳥居がある。鳥居の数十歩先に神門があり、その左には神楽殿がある。そして神門をくぐると右手に神馬、左手に神牛の実物大の像がある。神馬神牛とも当初は銅製であったが戦争で徴収された。神馬は今は銅色に似せて赤銅に彩色されている。栗毛ではない。神牛は黒毛和種であろうか、ゆったりと横たわり首をもたげている。さすが牛馬の神様と云われる神社だけのことはある、その直ぐ先にも神牛の石像が両側に座っているがこれはやや小振りである。更に社務所と御札所を右に見ながら石畳の参道を進むと両側に唐獅子の石像がありその正面に社殿が鎮座している。社殿は本殿（神殿）・弊殿（渡殿）・拝殿から成っている。拝殿内の正面右側には御輿殿があり細川公が奉納したと云う大きな神輿が座っている。拝殿正面から東側に廻ってみると境内に上ってくる狭い道が眼に入った。この坂道を逆に辿って行くと正面石段の横手に出る。古くはこの道を牛馬を牽いて多くの人がお参りしたのであろう、しかし今は使われていない。

そうこうするうちに来年卒寿を迎える元総代の二宮さんも到着、定刻になり拝殿をお借りして皆さん車座になって聞き取りは始まった。

二、由緒

当神社は、西暦一一〇〇年代に当地に建立されたとあるが、もともと京都・大将軍神社に端を発する。

京都・大将軍（たいしょうぐん・だいしょうぐん）神社は桓武天皇の平安京造営に際し、京都の四方に大将軍神社を祀り守護神とした。祭神は磐(岩)長姫命である。また長寿の神である。大将軍は陰陽道の方位神であり、また牛頭天王の息子でもある。その後、大将軍神社は京都から元加賀国篠原村に遷宮した。このときの祭神は保食神、伊邪那岐神、岩長姫神の三柱である。中でも保食神（うけもちのかみ）は食物神であるがその亡骸の各部からは粟・蚕・稗・稲・麦・大豆・小豆が生まれた他、頭からは牛馬が生まれたと言う。これが大将軍神社が牛馬の神と言われる所以である。そして、寿永年間（一一八二―一一八四）源平の争乱で平家の余族が北陸に敗走

したとき、同社に奉仕していた社司加藤兵部太夫なる者が、災害の波及するのを恐れ篠原村を退去、豊後国国東郡姫島に移る。壇ノ浦の戦いの後姫島を去り、太夫は豊後の洗里に転じてしばらく平安の日々を待った。（この時より洗里を時待と呼んだ、今の時松がこれである。）ある夜、神託があり「南方に清浄なる高山がある。この山嶺に遷座すべし」と。太夫は霊夢を感じ直ちに神勅に従って同山に奉遷、故郷の名をとって土地の名を篠原村と名付け、小倉山三社神と称した。以上については確かな記録があったが正徳年間（一七一一―一七一五）に火災に罹り焼失した。明治維新前は大将軍神社と称していたがその後、地名に因んで松原神社、更には保食神社と改称を重ねている。更に時を経て明治十二年、篠原村と鶴村にあった神社五社の保食神社への合併が認められた。合併後の祭神は保食神、阿須波神、波比岐神、加藤清正公、菅原神ほか全部で十七神に上る。そして現在の大将軍神社となったのは大正十三年に郷社へ昇格した年である。以上の由緒の大半については佐藤末喜さんから頂いた大分県公文書館蔵の神社明細牒資料「大分縣管下豊後國大分郡谷村大字篠原字松原村社（のちに郷社に昇格）大将軍神社」による。

大将軍神社の位置する谷地区はもともと肥後藩領地であったため、当神社には加藤清正公から賜った太刀、細川公から賜った棟札がある。二宮会長は、江戸時代一六三〇年・寛永七年の棟札があり、細川公が武運長久を祈って奉納、古国府村大工の矢野重三郎が棟梁と記してあるのを確認している。昔は境内に宝物殿があり太刀や槍が納められていたが盗難に遭い、今は本殿に太刀が残るのみである。大友宗麟が三十八歳のときに太刀を奉納したと神社の記録にあるがその太刀であろうか。宝物殿は今はない。

「大将軍」を「だいじょうごん」と読むのは何故か、正確なことは皆わからないと言うが、「肥後藩細川公が名付けたと言う記録が熊本に残っている」と後日、史談会の席で河野百雄さんから聞く。

「当神社は熊本の殿様と関係が深い、神輿には細川家の家紋「細川九曜」がついている。肥後藩奉納の太刀もある。太刀は一度研ぎにだしたが今は錆びている。最近は木箱を見るだけで中身は怖くて見れない。赤い柄の太刀もあるらしい。本殿には鬼瓦も奉納されている」と阿南総代長は言う。

今は熊本・肥後藩関係団体との交流はない。

三、氏子総代と神社

大将軍神社は小野、中村、阿鉢、篠原の四地区から各地区二名の総代、計八名を出し、これに区長四名が加わり祭礼等取り仕切っている。総代を代表する総代長は昔は総代の互選であったが今は四地区持ち回りとなっている。総代の任期は三年で、総代長一名、会計一名、総代六名の体制である。

神官は加賀の時代から代々加藤家が司めていたのは前述したが、今は前挾間町長の佐藤氏である。

現在の氏子は一二〇から一三〇戸である。

当神社は牛馬の神様を祀っているが、農耕用には馬よりも牛が多い。「牛歩」のたとえもある牛に比べて馬は馬力があり脚も長くて

早いので農耕用としては扱いにくかったのではないか。一方で、馬は人を乗せるのは勿論のこと、石や材木など重量物の運搬には適していた。昭和三十年代までは荷馬車が往来していた記憶がある。また軍馬としても祀られたのではないか。

拝殿の格天井には板絵馬が奉納されているが、牛よりも馬絵が圧倒的に多い。絵馬の起源は、ウィキペディア「絵馬」によれば、『奈良時代の「続日本記」には、神の乗り物としての馬「神馬」を奉納したと記されている。しかし馬は高価で世話も大変、そこで平安時代以降は板に書いた馬の絵で代用するようになった。』とある。また拝殿正面にかかる締縄は毎年掛け替えているが重量があり結構大変である。「昔の鎮守の森は巨大な松であったが、松の葉は光を通すので意外と明るい神社と言う印象だった。小学校の遠足は年間に何回かあったが一回は必ず大将軍神社に来ていた。」とは龍江さん御子息・勝富巳さんの弁、その松も松クイ虫にやられて全部枯れてしまい今はない。

四、春季大祭一月十三・十四・十五日

初日が最も盛大であり、人出が最も多い。初日に立つ市は、賀来の市・浜の市と並び大分の三大市と言われている。神社拝殿では先ず十時から式典がある。拝殿の板敷の床はこの日ばかりは畳が敷かれる。役員は黒羽織と青袴の正装で臨む。行政と関係団体の来賓も多数参列する。十七神が降臨し、祝詞奏上、玉串奉奠、など神事は続く。

大祭初日は神事に続いてひとぎ（餅まき）がある。ひとぎの餅は神社でついているが奉献された餅をまくこともある。巫女は女子高生四名に頼んでいる。巫女は神事の他に御神酒や御札を売ったりする役を受け持つ。

神楽殿では神楽を舞うが、神楽は毎年続いている。舞うのは庄内神楽が多い。上市の神楽が舞ったこともある。神楽を楽しみにしている参拝者は多い。

昔は境内と神社に通じる道端には露店が隙間なく立ち並び、坂下の第一鳥居までぎっしり続いていた。露店が多いため取り仕切り専門の人が居たようだ。その露店では苗木や瀬戸物、甘酒も良く売られた。焼き菓子や飴を目当てにカラスが沢山飛んでいた。今でも露店の苗木は安価で人気が高いらしい。昔は、遠くは竹田や久住、玖珠から牛馬を牽いて参拝していた。参拝者は神への御礼として餅を奉献した。期間中、天気が良ければ人出も多くアガリも多いが、雪が降ると人出もサッパリ減ったのでアガリも減ったと言う。今は牛馬を農耕用に飼う農家もなくなり（農業従事者の減少、高齢化、機械化が原因）神社に上げる者も居ないが、牛馬なしで遠くから参拝に来る客が多いのは今でも同じである。現在、上げられる牛は品評会などで優秀な成績を取った二、三頭のみである、それも神社から畜産関係に依頼するとのこと。

また、境内周辺の熊笹はご利益があり、参拝者は家に持ち帰り牛馬に食べさせて無病息災を祈った。熊笹は今でも一帯に生い茂っており持ち帰る人も多い。

昔は大祭初日に神社下の河原で牛のせり市が立った。農家は牛の親子を牽いてきてせりにかけ、子牛が売れたら親牛だけを牽いて家に帰るが、途中悲しそうに啼く親牛を見るのが辛かったと佐藤末喜さんは言う。

一方、子牛がせり市で売り渡しできるのは良い方で、ひどい時は別府の浜脇まで牛を牽いて行き、港で引渡したこともあったらしい。これは牛の買い手が四国から海を渡って別府に来る人が多かった為のようだ。

春の大祭と言えば普通は三月頃を連想するが、大将軍神社は三月ではなくて一月にする理由は、十三日から十五日にかけてする理由は、全ては肥後の殿様との縁か、皆良くわからない。

秋の大祭が九月なのは他の神社も九月が多いので理解できる。

尤も旧暦では正月から三月までを春、七月から九月までを秋としているので季節外れには当たらない。

五、秋季大祭九月十三・十四・十五日

秋季大祭では、有名な神輿の巡行がある。大分県三大神輿行列の一つに挙げられている。その行程は、十三日のお下りでは篠原地区が神輿を担ぎ神社から小野のお立ち寄り所まで練り歩く、十四日の神輿は小野のお立ち寄り所に鎮座のままである。最終日十五日のお上りは阿鉢・小野・中村の三地区がお立ち寄り所から神社までの道のりを担ぐ。神輿は各地区の公民館に立ち寄るだけで各戸には寄らない。神官は全行程に同行し、公民館では祝詞をあげてくれる。また、十三日が平日の時は地元の谷小学校は半ドンになったらしい。「半日でも休みになるのが嬉しかった」と勝富巳さんは懐かしがる。これは小学生が囃子隊となって笛を吹き太鼓をたたく役目を担っていたからだった。神輿の囃子隊は昔は歩いていたが今は軽トラックの荷台に乗って囃す。道中、奉納のおヒネリも沢山頂戴したらしい。神楽の囃子も小学生が一部担った。

六、夏祭り

上記二つの大祭のほか、毎年七月には総代と区長が中心になった夏の祭りがある。規模は小さい。

ほかには、「よど」と言う祝いがあり餅をついて配ったが、今は無い。いずれの祭りにも餅はつきものであったようだ。

七、余談

「大祭にはお金がかかる。アガリだけでは成り立たない。遣り繰りが大変。天気に人出が左右されるので苦労する。」と阿南総代長。アガリとは祈願料、御札料、賽銭、寄進などを指し、これを積み立てて神社の補修と祭礼などの費用に充当する。それに足して氏子から御神酒銭を取り立てて、どうにか遣り繰りしているとのことです。

余談ですが、現在のＪＲ久大線の前身である大湯線（一九一五年・大正四年、大分⇔小野屋に開通）の鬼瀬駅（昔の鬼ヶ瀬驛）が開業当初から駅としてあったのは大将軍神社の大祭に参詣する客が多かった為ではないだろうか、駅に降り立った客は御札を買い求めて

長い行列をつくったという。

八、結び

今日は佐藤龍江さんの御子息からも小学校時代・昭和三十年代の神社に纏わる話を聞かせて頂きました。また、阿南総代長の奥様にも茶菓の御世話をして頂きました。御孫さんも一緒でした。

御世話になった皆様に厚く御礼申し上げます。

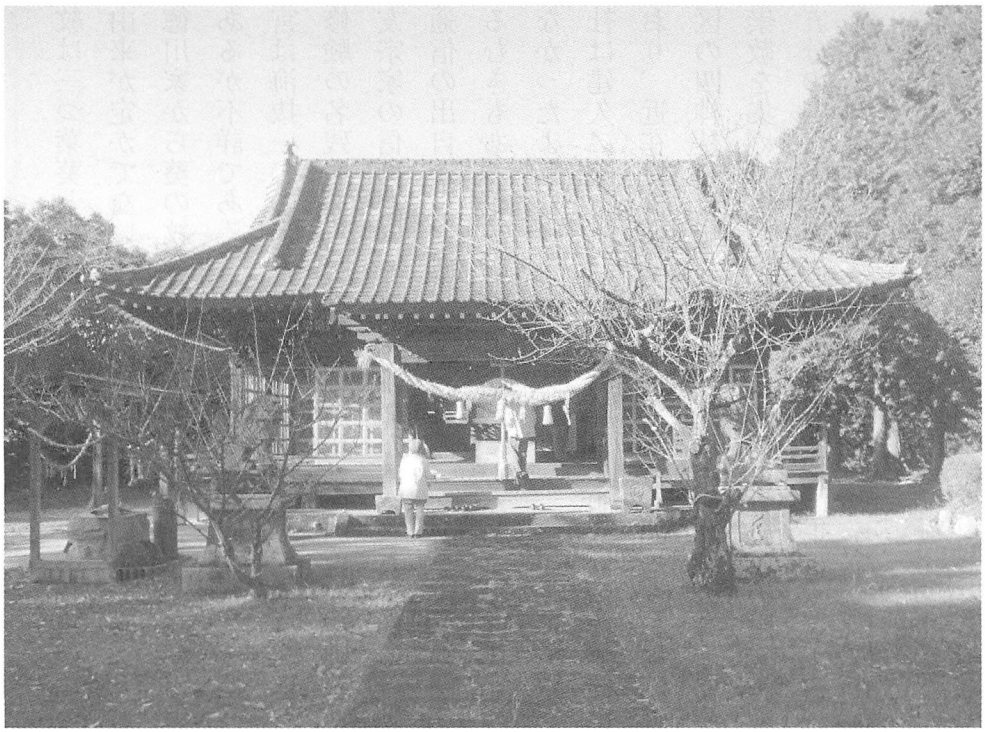
尚、境内には由緒書きや石碑など貴重な資料が沢山あります。関心のある方は一度参拝して現物を御覧下さるようお薦めします。私は一月十三日の春季大祭にお邪魔することにしました。

記

調　査　日／平成二十四年十一月十八日、午前九時半～十一時半

神社関係者／元総代長・二宮一夫様、総代長・阿南一男様

史　談　会／二宮修二、佐藤末喜、坂本勝信、佐藤龍江、佐藤周太



神　社　全　景